

# 里親家庭で育つ子どもたち

東京都小規模住居型児童養育事業「坂本ファミリー」養育者

里親ひろば ほういっふ代表 坂本 洋子

## 1. 正しく知ってほしい

今年1月に放送された「明日、ママがいない」という児童養護施設や里親を取り上げたドラマを覚えていらっしゃるだろうか？ スポンサーが降板するなか、最終回まで放送されたあの番組だ。初回の放送が終わった翌日、ある小学校の朝の会で担任が「昨日、放送されたあのドラマは作り物です」と言ったそう。里子である5年生の男子児童は頼んでもいないのにクラスメートに釘をさしてくれた担任に一層の信頼が増したという。

先生が心配したのは、ドラマを観た小学生が児童養護施設や里親の現実はあるのだと安易に理解し、クラスの中で「おまえもポスト？」などと彼がいじめられ、揶揄されることを防ぎたかったのだろう。フィクションだからと割り切って客観的に観てくださる大人は良いのだが（大人であってもその世界を知らなければドラマを現実だと思ってしまうことだってあるだろう）、現実とはあまりにかけ離れた描き方に私も不安を覚えた。「あんな里親だご近所に思われそうでいやだわ」と言う仲間もいた。里親も子どもたちも実は地域で偏見や誤解、孤独を味わいながら生活しているという側面があるのだ。

全国里親会でも「これまでの日本の児童福祉関係者の努力に水を差すようなことはやめてください」、「差別・偏見を助長させるような言い回しは絶対にやめてください」、「児童や里親、施設職員が傷ついています」等訴えた。

子どもたちは自ら希望したのではないのに、親に育ててもらえない状況に置かれた。なぜ、自分の身にこのようなことが起きているのか、理解できない子どもはたくさんいる。「子どもたちのせいではない」ということをまず、大人は胸に刻んでおかななくてはならない。そのうえでどのように痛んでいるのか、を知ればあのような描き方はできなかったはずだ。

## 2. 社会的養護の現状

本来なら子どもは家庭の中で守られながら育つべきだが、適切な養育が受けられない場合、公的な責任のもと、社会が育てることを「社会的養護」と呼ぶ。子どもは社会の宝、どこで育とうと子どもは幸せになる基本的人権は保障されるべきだ。

この10数年で、家庭のなかで安定した生活ができない子どもたちは増加している。平成25年の出生率は1.43で2年連続微増だが、生まれてくる子どもの減少に対して保護される児童は確実に増えているのが現実だ。要保護児童となった子どもたちは、乳児院や児童養護施設、里親家庭に措置されることになるが、児童養護施設に入所する半数以上は虐待を受けた子どもだと言われている。

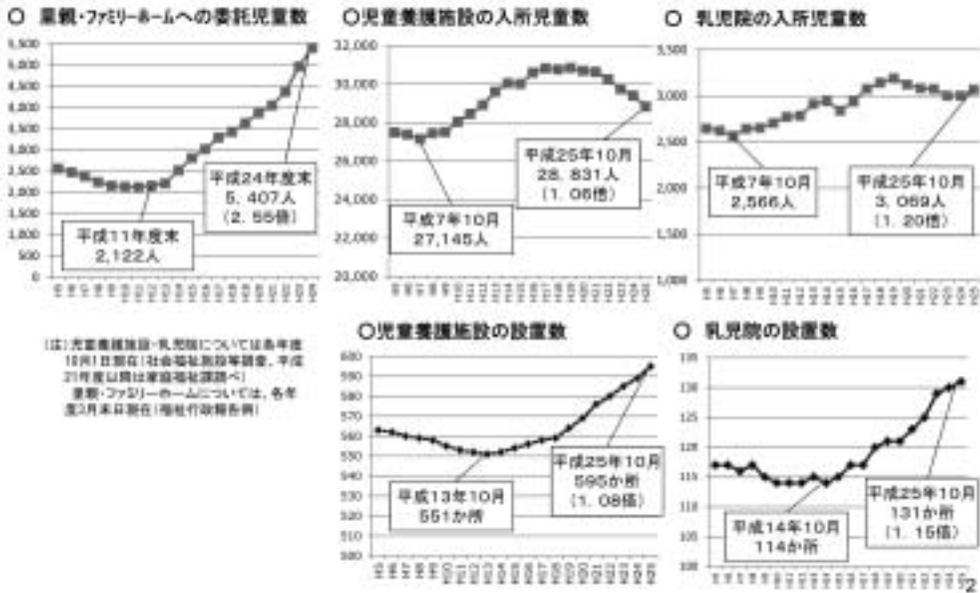
平成24年度の全国の児童相談所での児童虐待相談対応件数は、66,807件（前年度比6,888件増）で過去最多を更新した。年々驚く勢いで相談件数が増えているのだ。そして悲しいことに平成24年度は99人の子どもが虐待で亡くなっている。背景には望まない妊娠・出産が増えていることがあげられるだろう。

### 子どもの権利条約 第20条

1. 一時的若しくは恒久的にその家庭環境を奪われた児童又は児童自身の最善の利益にかんがみその家庭環境にとどまることが認められない児童は、国が与える特別の保護及び援助を受ける権利を有する。
2. 締約国は、自国の国内法に従い、1の児童のための代替的な監護を確保する。
3. 2の監護には、特に、里親委託、イスラム法のカフアーラ、養子縁組又は必要な場合には児童の監護のための適当な施設への収容を含むことができる。解決策の検討に当たっては、児童の養育において継続性が望ましいこと並びに児童の種族的、宗教的、文化的及び言語的背景について、十分な考慮を払うものとする。

## (2) 要保護児童数の増加

要保護児童数の増加に伴い、ここ数十年で、里親等委託児童数は約2.6倍、児童養護施設の入所児童数は約1割増、乳児院が約2割増となる。



【参考資料：厚生労働省「社会的養護の現状について」平成26年3月／「要保護児童数の増加」】

### 3. 里親制度の現状

里親家庭は平成25年3月末現在全国に9,392世帯が登録し、養育しているのは3,487世帯、そこに4,578人の子どもたちがいる。ファミリーホームは里親を大きくした家庭養護で、常に5~6人の子どもたちが生活をする。このファミリーホームは全国に218ヶ所あり、829人が暮らしている。

子どもの権利条約20条をみてもわかるように、里親委託や養子縁組が優先とされているが、日本の場合おおまかに言うと9割が施設入所、里親委託は1割強というのが現状だ。アメリカは77%、オーストラリアは93.5%、お隣の韓国では43.6%が里親委託という数字をみれば、日本の14.8%（平成24年度末現在）は特に低いことがわかる。実は国連からこの現状は問題だとされているのだ。それでも平成14年度には7.4%だったのだから確実に上昇しており、国も力を入れて増やす努力はしている。

里親制度といっても里親のためにある制度ではなく、子どもの利益となるよう児童相談所がアセスメントを行い進めていく。東日本大震災時に大いに活

用されたのが「親族里親」というもので、3親等以内の親族が里親として親戚のお子さんを引き受けることができる制度だ。また、皆さんがよくご存じなのが「養子縁組里親」だろう。養子縁組に出してもよいと生みの親御さんが承諾すれば、子どもは養子縁組への候補児童となる。縁組までは望んでいないが養育のみしてもらいたいと希望すれば、「養育里親」の候補児童となる。しかし里親だとんだか子どもを取られる気がするから気が進まない、そのうち引き取りたいからと児童養護施設を希望すると、施設に措置される。親権の強い日本では育てられない、育てる意思がない状態でも親権を持つ方の意思が尊重されることになる。

【図「里親の種類」(厚生労働省より) 次頁参照】

虐待以外にどのような理由で里親家庭に来ているかという点、父母の養育拒否、行方不明、経済的理由、養育能力などが挙げられる。最初に記したように、これらは子どもに原因があるのでも責任があるのでもない。あくまでも親の人生の結果を子どもが背負って生きているということだ。それなのにこの子たちは差別され、偏見の目で見られることがある

## ○ 里親の種類

○里親は、要保護児童（保護者の無い児童又は保護者に監護させることが不適当であると認められる児童）の養育を委託する制度であり、その推進を図るため、  
 ・平成20年の児童福祉法改正で、「養育里親」を「養子縁組を希望する里親」等と法律上区分するとともに、  
 ・平成21年度から、養育里親・専門里親の里親手当を倍額に引き上げ  
 ・養育里親と専門里親について、里親研修を充実

種類	養育里親	専門里親	養子縁組を希望する里親	親族里親
	対象児童 （保護者のいない児童又は保護者に監護させることが不適切であると認められる児童）	次に掲げる要保護児童のうち、都道府県知事はその養育に關し特に支援が必要と認めたもの ①児童虐待等の行為により心身に有害な影響を受けた児童 ②非行等の問題を有する児童 ③身体障害、知的障害又は精神障害がある児童	要保護児童（保護者のいない児童又は保護者に監護させることが不適切であると認められる児童）	次の要件に該当する要保護児童 ①当該親族里親に扶養義務のある児童 ②児童の両親その他当該児童を親に監護する者が死亡、行方不明、拘禁、入院等の状態となったことにより、これらの者により、養育が期待できないこと

（厚生労働省ホームページより）

し、私たちが驚くようなこともある。

うちの隣は公園なのだが、木々の葉を棒でたたき落している子どもを、やんちゃ坊主がいるなど自宅から見ていた。しばらくすると近所の方がいらっしゃって公園の枝をたたき落としたのはお宅の子ではないかと聞いてくるではないか。うちの子は朝からずっと家にいますが、と答えると「どんな子でも悪いことは注意しなきゃいけないから」と言い訳をしてお帰りになった。まず怪しいのは血縁関係にない子を育てている得体のしれない家族、と思ったのだろう。子どもに対して「何人家族？ みんな血がつながっているの？」などと露骨に聞く大人もいた。

ある方は初めて里親になり幼児を引き取ってしばらくしたら、「ご主人の隠し子を引き取ったらしい」と近所で噂されていたと里母さんは苦笑していた。

ある里親家庭に預けられたネグレクトのお子さんは、ご飯の炊ける匂いとトウモロコシをゆでる匂いに「なにこれ?! 気持ち悪い!」と外に出てしまったという。コンビニの弁当しか食べてこなかった子どもには、私たちが「いい匂い」と思う炊き立てのご飯も「気持ち悪い匂い」になってしまう。

### 4. わたしたち里親家族

我が家は夫婦と3歳～19歳の子どもが6人の8人家族だ。1985年から里親を始めてもう29年になる。里親になったとき20代だった私は、里親ではない人生より里親をしている人生のほうが長くなった。

子どもは当然、授かると信じ楽しみにしていたが、

子どもと暮らす生活はないとドクターから宣言された時には絶望の淵にいた。ことさらに子ども好きだった私に子どもがいらない人生があろうとは思わなかったし、パーフェクトを親から求められ続けて成長した私は、この現実を受け入れるのに相当な時間が必要だった。

新婚旅行中に「もし、授からなければ家庭に恵まれない子どもを引き取って育てよう」と話したことを思い出し、児童相談所に出向いたのは結婚2年目だった。そんな話をしたことも今になって思えば、確実に運命の神様が私を里親の世界に導いていたのだろう。皆さんが普通にしている「子育て」を自分もしてみたい、お母さんになりたい、と単純な気持ちで里親になったが、29年間、総勢16人の子どもたちが一日中「お母さん」「ママ」と呼んでくれた。なんとという果報者!

16人のうち一番年長は33歳になった。彼は高校を卒業してから親元に戻り、今は実母と幸せに暮らしている。お母さんは時々、写真を送ってくれ、電話で様子を教えてくれる。「坂本のお母さんがいたからあの子はここまで立派になった」と今は知的ハンディがありながら一般企業で働く息子との生活は穏やかそうだ。「お母さん、坂本の家で食べた大根の千六本の味噌汁が飲みたい」と育った味を懐かしんでくれるという。

彼は父親と暮らしていたが、仕事で家を空けるときは炊飯器にスイッチを入れて出かけていたらしい。炊飯器のご飯が無くなると食べるものはなかつ

たようだ。当時小学生だった彼は、後日「湯沸かし器のお湯でインスタントみそ汁をとかして飲んだこともあった」と言っていた。

10歳で我が家に来た彼は周りに誰がいても自分以外の世界は遮断し、アニメのキャラクターらしい会話だけが彼から聞こえていた。離婚してから音信不通になっていた実母は、息子が里親家庭で育っていることを知り、驚いて会いにきたが彼の希望で高校卒業を待って実家に帰っていった。

就職して数年は、必ずボーナスが出ると「大きなケーキを買ってください」とクリスマス前にはお金が届いた。「いいの？ もらって」と聞くと、「いいよ、また働けばいいんだから」とサラッと答えるが、少ないボーナスの3分の1を送る彼に感心したものだ。

現在我が家の一番小さな子は3歳、その上に5歳と幼児が続く。あとは小学生、中学生、大学生が2人の6人だ。

大学生たちはすでに私の右腕になっており、家事・育児も積極的に動く育メン（育兄？）に成長している。以前、4学年に5人いた年子が徐々に育っていき、現在下の2人が大学生になった。5人が幼かった頃は「5つ子を育てているみたいね」と言われたものだが、よくぞこなせたと我ながら昔の自分に拍手を送りたい日々だった。1人の通院に5人連れて出かけることもあり、待合室はうちの子たちでいっぱい！（この子たちは何だろう？ 兄弟？ 妙に年齢が近いな…。でも、顔似てないし…）と考えている好奇のまなざしが刺さるように感じたものだ。こんな時に限って、誰かがわがままを言いだしてなおさら視線が集中するのだった。

### 5. 違うことこそすばらしい

「産む」という道が閉ざされていると知ったとき、ある方が「パーフェクトな人生はないんだよ」と声をかけてくださった。生きることってパーフェクトじゃなくていいのだと初めて知った瞬間だった。それから里親という人生を過ごす中で「違うということは素晴らしいことだ」としみじみ知ることになる。里子として我が家に来る子どもたちは、表も裏も作りようもない人生に恨み言を言うこともなく、前向きに健気に生きている。

ただ、当初子どもたちは傷つきやすく、自己肯定感も低い。そんな子どもたちにいま必要なものは何

か、を探りながら育てていくうちに、彼らは自己受容ができて自分に自信を持つようになる。環境さえ整えれば、子どもたちは自分で選択し、たくましく生きていけるのだと子どもたちの成長から学んだ。

我が家の大学2年の子が代表、大学1年の子が事務局になり当事者の里子たちの集まる会を立ち上げ、活動を始めて3年目に入った。月に一度の活動は、梅雨の時期はカラオケやボーリング、夏になればそうめん流し、BBQ、季節が変わればハロウィンやクリスマスなどと楽しんでいる。里子同士の交流がないと不安に思うこともあるだろうが、地域に同じ境遇の子どもたちがいることを知り、共に育ちあっていくことはとても大切だ。

さて、うちの大学生たちは私の講演時に里親家庭で育った者として家庭の大切さと自分の人生を語りだした。今年6月の私の講演で、初めて語った大学1年の子どもの原稿を、彼に許可を取ったので掲載したい。3か月前まで高校生だったとは思えない成長に感動したが、会場で涙を流す方がたくさんいらっしゃったことに驚いた。「生い立ちをマイナスにとらえず、逆手にとって弱みを強みに替えて生きていく」、そんな人生であってほしいと願っていた通りに育ってくれている。もう必要ない、と子どもに言われるまで親として彼らを支え続けるつもりだ。

「里子の立場から家庭で暮らすことの意味、家族という存在の有り難さ」

こんにちは。A大学B学科1年のCです。

私は4歳から里親家庭で里子として生活してきました。その経験から今日は家庭で暮らすことの意味と家族の存在の有り難さについてお話したいと思います。

私は実親によるネグレクトが原因で、4歳の誕生日を迎えた数日後に里親家庭である坂本家にきました。暑い夏、額と鼻に汗を垂らして、いくつもの星マークがついている柄のTシャツを着ていたことは今でも覚えています。家庭にきた当初の私はいわば問題児でした。母にかみつきの、物を投げ飛ばしていました。言葉もそれほどはっきりと話すことができませんでした。IQも高くなく、知的障がいがあるのではと言われた程でした。しかし、両親はそのような私

を受け入れてくれ、したいことは何でもさせてくれました。そして、叱る時は何故いけないのかを真正面から教えてくれ、褒める時は手をたたいて褒めてくれました。

また、私と同様に、様々な事情で家に暮らしている兄弟は当時末っ子であった私を大切にしてくれ、お互いに同じ里子同士、励まし合い、助け合ってきました。2つ上の姉は、私ที่บ้านに来た当初からいつも寄り添いながら面倒を見てくれました。兄は年子であり、最も身近な存在で私にいつも優しく勉強など多くのことを教えてくれました。そして、家では家事など将来ひとりで生きていくために必要なスキルを身につけるよう努めてきました。

私は里子として多くの経験をしてきました。自分が里子であることを小学校、中学校では隠して生きてきました。高校2年生の時に初めて部活の仲間に言いました。その時のことは忘れられません。部活の仲間はその私の存在を理解してくれました。しかし、自分が里子であることを心の中で腹を立てていました。「なんで、こんなふうに生まれたんだ」と普通に家庭で暮らしている人と比べます。

私は体が細く、体力がない、おっちょこちょいでいつも失敗ばかりします。骨折も事故にもありました。これも幼い頃のネグレクトの影響だろうと思っています。しかし、そのような私にポジティブ思考と自信を与えてくれたのは両親や兄弟姉妹です。ほとんど言葉もまともに話すこともできず、「この子はいずれ手離さなくてはならないかも」と親が不安に感じていたくらい、心も体も痛んでいました。その私が大学生になり、将来を考え、精一杯、ポジティブに生きている姿を当時はだれも想像できなかったでしょう。

言葉をかけてもらえる、何かを教えてもらえる、一緒に何かを知る、経験することができる。家庭という場所は私にとって、将来の自分を作るのに大切な場所であり、自立した後も帰ってくるのできる寄りどころです。私が児童養護施設で生活していたら、自分の寄りどころを確保できたでしょうか。施設という場所には限界があります。18歳になったら、措置解除になり、ふつうは出ていかななくてはなりません。

産み親を知らない、頼れる場がない、このような状況の子どもたちはたくさんいます。施設を転々としながら生きてきた人は、特に自分の居場所がなくて困っています。

家に帰って、ご飯を食べて、風呂に入って、家族とふつうに談話する、これだけでどれだけ安心して暮らしていけるのでしょうか。

そして、私は14年間里親家庭で暮らし、家族の大切さを感じてきました。施設と違って、里親家庭には母親、父親と呼べる人がいて、兄弟姉妹がいます。両親にはいろいろと悩み事などを相談することができ、将来必要なスキルを教えてくださいます。また、兄弟姉妹とはお互いに切磋琢磨しあえます。家族というものは血縁関係がなくても、お互いに助け合って生きていける、それを知った14年間でした。

将来私は海外支援に携わるNPOやNGOに就職し、誰もが安心して笑顔で暮らせる社会を作りたいと思っています。誰もが「生まれてきて良かった」と思えるような支援をしたいのです。私が海外に目を向けるきっかけをつくってくれたのは両親です。「血縁関係がないことをプラスに考えなさい。世界中どこで生きてもいい自由があるんだよ」と数カ国に行かせてくれました。大学では社会福祉を勉強し、専門は地域福祉を選択しています。コミュニティーソーシャルワーカーとして子どもたちがすくすく育つことのできる地域づくりに携わりたいです。

家庭で暮らすことによって、将来のビジョンを立てることができました。また、里子として自分の存在について深く考えることもできました。

里親制度で私は家族にめぐり会えたことに感謝をし、これからは私が多くの方々に家庭の大切さを訴えていきたいと思っています。そしてこれからひとりでも多くの子どもが私のように家庭で暮らせることを願い、また私自身、一生懸命物事に取り組み、自分が受けてきた幸せを今度は誰かに与えることができるよう生きていきたいと思っています。みなさま里親制度を理解して下さい。これからもよろしく申し上げます。

以上で私の話を終わらせて頂きます。

ご清聴ありがとうございました。